



ダブルホームプロジェクトの成果： 学生の成長に大学がどのように寄与できるか

全学教育機構 学生支援部門長 大島 勇 人
(医歯学系・教授、硬組織形態学分野)

1. 特集にあたって

本特集では、平成19年度文部科学省事業「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」(http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/gakusei.htm、以下学生支援 GP) に採択された「ダブルホーム制による、いきいき学生支援～地域協働による、学生の自律を目指す、予防的環境の構築～」について、第二のホーム担当教員の山村健介先生(医歯学系・准教授、口腔生理学分野)、参加学生の清野雄多君(歯学部歯学科2年)、五十嵐隼人君(経済学部2年)にもご寄稿頂き、学生支援 GP の活動を歯学部で紹介することを趣旨としております。

平成20年7月5日にBSNで『新潟県の大学・短大「そこが知りたい!2008」』が放映されました。その中で新潟大学の紹介は、他の大学・短大と比較して異質の出来映えでした。それは、紹介の大部分を占めたのが「ダブルホームプロジェクト」であり、それを企画したのは「ダブルホーム」の学生だったからです(図1)。「私たちは狭い世界で生活している。しかし、大学の外へ出ると、そこにはずっと大きな世界があった。」で始まるビデオは4分足らずでしたが、「ダブルホームプロジェクト」の一つの成果が見えてきます。『自分の知識と自分の想いで社会にエントリーするのが大学生である。そして、「夢」のもう一歩先へ、つくりあげている「未来」がある。』と彼らの声で語りかけています。学生ならではの発想と企画力には感心させられます(http://www.ohbsn.com/daigaku_sindai/ 参照)。

この「ダブルホームプロジェクト」のアイデアが始まったのは今から1年以上前に遡ります。平成19年5月30日に文部科学省より平成19年度学生支援 GP の公募について通知があり、新潟大学では、河野正司理事(新潟大学名誉教授、歯科補綴学)を中心にプロジェクトチーム(ワーキンググループ:WG)が結成されました。本WGでは、教員と事務職員が協働でGPの申請書をまとめるという、新潟大学では前例のない試みとなりました。申請書をまとめる実施のチーム・リーダーは仙石正和副学長が務め、プロジェクトのブレーンは西村伸也教授があたり、各学系、全学教育機構、キャリアセンター、保健管理センター、国際センター、大学教育開発研究センター、学務部からメンバーが選出されました。本GP事業は「学生の人間力を高め人間性豊かな社会人を育成する」というキーワードをもとに「入学から卒業までを通じた組織的かつ総合的な学生支援のプログラム」を提案するというものであり、仙石副学長と西村教授二人の強力なリーダーシップと斬新な



図1 平成20年7月5日にBSNで放映された『新潟県の大学・短大「そこが知りたい!2008」』からの一コマ。企画は歯学部清野君が参加するXホーム(φホーム)プロジェクト

アイデアをもとに、WGのメンバーが、昼夜、休日を問わず集い、申請書をまとめ上げました。7月2日に申請書を提出し、8月22日のヒアリングを経て、8月29日に採択の連絡を受けました。まさに、本学の学生支援GPのテーマにも繋がる「教職員のダブルホームプロジェクト」と言えるような作業を通しての成果となりました。

平成19年9月21日開催の全学教育機構委員会において、本学学生支援GP事業の企画・実施組織としての学生支援部門、学生支援担当副機構長、学生支援部門長の設置が承認され、仙石正和副学長が副機構長に、私が部門長に就任しました。学生支援部門の事務的なサポートは学務部学生支援課学務企画係の山崎利弘係長、佐藤亜紀事務職員が担当することになり、その後、学生支援部門専任教員として浜島幸司特任准教授、部門専任の長坂玲子事務職員が任用されました(図2)。また、平成20年2月1日からの下條学長就任に伴い、副機構長を紙谷智彦副学長(図4)が務めることになりました。

2. ダブルホームプロジェクトとは？

■ダブルホームプロジェクトの概要

ダブルホームプロジェクトでは、「第一のホーム」と「第二のホーム」の二つのホーム(ダブルホーム)を規定しています。

「第一のホーム」とは、学生さんが入学し卒業するまで「学び」を支援する学部・学科です。歯学部歯学科、歯学部口腔生命福祉学科は「第一の



図2 学生支援部門スタッフ(ダブルホームの居場所であるB454教室で)。前列左から浜島准教授、私、山崎係長、後列左から長坂事務職員、佐藤事務職員

ホーム」です。新潟大学は多様な学問分野・領域を有する総合大学ですが、これまで学部・学科を横断して幅広く学生と教職員が繋がりをもつような場はありませんでした。そこで、文系、理系、医歯系の学生が専門の壁を取り払って自由に参加できる「第二のホーム」を設けました。今年度実施した新入生調査によると、多くの学生が他学部の学生や教員、さらには地域と繋がりをもつことを期待していることが明らかになっていることから、「第二のホーム」の必要性が示されていると言えるでしょう。

「第二のホーム」では、主に本学の教員が地域と連携して取り組んでいるプロジェクトに参加します。プロジェクトへの関わり方はホームにより異なりますが、どのように関わるかはプロジェクト担当教員と相談しながら、ホーム自身が決めることとなります。プロジェクトの中には、「知に向かうプロジェクト」として位置づけられているものもあり、世界で活躍する研究者との関わりもあります。ホームではメンバーと話し合いながら多くの経験をすることによって、心を鍛え、自らのライフキャリア(自分らしい生き方)に活かすことを目的としています。

このような活動を通して学生と教職員が一体となり、学生支援から地域貢献へ、さらには新たな研究へと発展することになれば、新潟大学がもつ総合大学としての多面的な機能が活かされることとなります。また、「第一のホーム」における学生支援と「第二のホーム」における学生支援の連携が学生の人的成長には欠かせないと考えています。

ダブルホームプロジェクトに参加した学生たちは、様々なプロジェクトに参加して活動を行います。リユースのプロジェクトに参加したホームは資源の有効利用について考え、地域貢献プロジェクトに参加したホームは、様々な体験を通して地域の方々と交流しました。

今年はさらにホームが増えて参加プロジェクトもますます多様になっています(図3)。新潟県阿賀町の調査に参加するホームは医療や経済など生活に関わる問題を聞き取り調査するとともに、優れた自然や文化など地域の埋もれた資源を調べます。調査は地元の人々とともに行い、結果は地元

home	カラー		名称	プロジェクト	担当教員
A	青	橙	blange	キャンパス町内会プロジェクト	社会連携センター・教授 松原幸夫 先生
B	黒	白	pandasmith	過疎・高齢化の進む中山間地で頑張る “小国町森光集落”	農学部・教授 福山利範 先生
D	黒	橙	さんせっと	ヒメサユリ復元活動を通じた村づくり (新発田市板山)	農学部・教授 新美芳二 先生
E	紫	白	アース・アース (Earth)	西区 DE アート	教育学部・教授 近藤フチエ 先生
F	黒	銀	cuttle	日本海沿岸地域の伝統的な漁撈習俗と その成立	人文学部・教授 池田哲夫 先生
H	赤	橙	TSUBASA	環日本海プロジェクト	工学部・教授 金子双男 先生
I	白	橙	あい	学生と住民との協働・新潟県長岡市 栃尾表町での雁木づくり	工学部・教授 西村伸也 先生 工学部・准教授 岩佐明彦 先生
J	緑	白	なごみ	こころを科学しよう！	脳研究所・教授 中田力 先生 脳研究所・准教授 鈴木清隆 先生
K	桃	黒	かくれが♡ピンクロ	親と子の建築講座	教育学部・教授 五十嵐由利子 先生
L	黄	緑	merci	メダカに学ぶ環境科学	理学部・教授 酒泉満 先生
M	紫	緑	colt	良寛さんを通してみる和の心	教育学部・准教授 岡村浩 先生
N	緑	藍	朱鷺	人間理解と支援の地域福祉プロジェクト	歯学部・教授 鈴木昭 先生
O	黄緑	橙	新魅明	新潟地域における米品質に及ぼす 温暖化の影響	農学部・教授 三ツ井敏明 先生
P	緑	青	Niere	ヒト腎臓・尿プロテオームプロジェクト	医学部・教授 山本格 先生
Q	青	銀	sunQ	新潟デジタル・メディア研究会	人文学部・准教授 北村順生 先生
C	青	白	MONO	新潟大学学生・阿賀町合同ミニ学術調査隊	農学部・教授 紙谷智彦 先生
G	黄	橙	暖		
R	黄	黄緑	あっとほーむ		
S	青	白	MATHy		
X	白	桃	φ	広報プロジェクト	歯学部・教授 大島勇人 先生

図3 平成20年度第二のホーム各ホーム担当プロジェクト一覧。現在、休会中のCホームと広報担当のXホーム以外に18ホームが活動している

のみならず地域外へ向けても発信する予定です（図4・5）。

このような第二のホームでは、学部を越えた新しい仲間との交流を深める場となるだけでなく、次のような効果が期待されています。

- 多様な価値観の方とのふれ合いから生まれるコミュニケーション能力の向上
- 生活者の立場で見ることによりわかる自分の専門分野の必要性と重要性の認識
- いきいきとした学生生活によって構築される、悩みに陥ることを未然に防ぐ環境の整備
- 卒業後も財産となる人との繋がりから生まれるネットワークの形成

第二のホームは、1～3年生各8名、合計24名の規模で構成される計画です（今年度は1～2年生10～20名程度で構成）。このホームには分野を異にする教員2名と事務職員1名、そしてフェロー（名誉教授、同窓会会員など）、大学院生によるチューターも加わり、ホームの運営に関してサポートします。さらに、このホームを経験し、活動のポートフォリオを完成した4年生がピアサポートのチューターとして参加する予定です。

■学生支援 GP の評価

本取組は継続的に外部の専門家によるチェックを受けながら、逐次そのシステムを改善していきます。教育関係者、他大学の教員、企業の経営者などによる外部評価者の委員会（評価委員会）が、第二のホームの活動報告に加えて、学生へのインタビューや面接調査を行い、客観的データの検証をあわせて詳細な評価を毎年企画・実施していきます。学生支援部門は評価委員会の評価と自己評



図4 新潟大学学生・阿賀町合同ミニ学術調査隊。後列右から二人目がプロジェクト担当教員の紙谷智彦教授

価の結果をまとめ、関連委員会と連携して次年度の改善に繋げています。

平成19年度の本ダブルホームプロジェクトの評価の詳細はホームページで閲覧できますので、どうぞアクセスして下さい（<http://www.ge.niigata-u.ac.jp/iie/gakuseiGP/bumon/H19hyoka/H19graph.pdf>）。

■ホームページの立ち上げ

平成20年3月14日にダブルホームプロジェクトのホームページを立ち上げました（<http://www.ge.niigata-u.ac.jp/iie/gakuseiGP/>）。ページ構成は、「トップページ」（図6）、「概要・詳細」、「部門について」、「活動の記録」、「ホームカレンダー」、「ポートフォリオ」、「Q&A」、「案内パンフレット」、「アクセスマップ」、「リンク」、「English」からなり、逐次内容のアップデートを行っていますので、是非一度お立ち寄り下さい。また、3月には学生支援部門の居室の整備が終わり、各ホーム活動の拠点としての利用が出来るようになりました（図2）。

■eポートフォリオについて

ダブルホームプロジェクトにおいては、学生一人一人が地域連携活動や事前・事後学習について、eポートフォリオに記録し、学生と教員間の双方向的なコミュニケーションを目指しています。各学生の地域連携活動を記録するとともに、学生と教員間の双方向的なコミュニケーションを可能とするため、現在運用中の統合型学務情報システム内の大学統合データベース（DB）システム的环境下に、ポートフォリオシステムを構築しており、平成20年度中に完成する予定です。



図5 新潟大学学生・阿賀町合同ミニ学術調査隊。地域の人たちの指導で笹団子づくりをする学生たち

新潟大学 **全学**
教育機構
学生支援部門

トップページ
概要・詳細
部門について
活動の記録
ホームカレンダー
ポートフォリオ
Q&A
案内パンフレット
アクセスマップ
リンク
English

2008年7月						
日	月	火	水	木	金	土
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

●色の白枠をクリックするとその日のスケジュールがご覧いただけます。

新潟大学全学教育機構
新潟大学全学教育
国際研究センター



ここから始まる、私の新しいキャンパスライフ



平成19年度文部科学省事業「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」

ダブルホーム制による、いきいき学生支援
～地域協働による、学生の自律を目指す、予防的環境の構築～

第二のホーム

この取組は、皆さんが日常を過ごす拠点(ホーム)を、学部・学科・学年の枠を超えて形成するものです。研究室やゼミ等、学部・学科の専門教育を行う従来の拠点である第一のホームに対して、新しい第二のホームは、文系・理系・医歯系の学生が集まる総合大学の特色を活かし、学部・学科・学年を超えて構成します。



地域で活動できるプログラム

第二のホームでは、本学の教員が地域と連携して取り組んでいる教育プログラムや研究プロジェクトに関わり、地域住民の立場から調査活動を行います。

どのプロジェクト等の調査活動を行うかは、それぞれのホームで決定することになります。また、長岡市や佐渡市へのバス移動等は大学で支援します。

[ダブルホーム制の概要・詳細](#)

7月のスケジュール

19のホームが、プロジェクトにあわせて活動しております

地域活動を計画されるホームの皆様は、「行程表」ファイルをご記入・提出してください。「アクセスマップ」「地域活動をおこなうにあたって」にエクセルファイル、PDFファイルがダウンロードできます。

更新履歴

2008年7月22日「案内パンフレット」に、『ダブルホーム制度』vol.1を掲載しました。X(✕)ホームが、企画・編集・作成をおこなったものです。

部門からのお知らせ

図6 ダブルホームプロジェクトのホームページ

将来的には、ポートフォリオの内容は必要に応じて一般公開し、大学における自己の人間の成長を含めた学習・成長のツールだけでなく、学生時代に学んだ知識、スキル、インターンシップなどの様々な経験、実際の成果物を雇用市場や進学先にアピールするツールとして活用される様なシステムに発展させていきたいと考えています。

3. 今後の課題と展望

新潟大学においては、大学の目的等に基づき学生支援の目標を定め、学生支援の取組を長年にわたり、具体的かつ組織的に実施しており、学生の大学生活を充実させることに大きな成果を上げてきました。しかしながら、メンタルな問題を抱えて立ち止まる学生の数は増加傾向にあり、卒業生

アンケートにおいても、大学に対して、プレゼンテーション能力、議論する能力、対人関係構築能力、協調する能力の涵養が不十分であるという結果が出ています。さらに、企業アンケートにおいても、大学に対して上記の能力の育成を求めており、大学は専門家の育成と同時に学生の人間的な成長にも積極的に関わることが期待されています。

本ダブルホームプロジェクトは、総合大学の特徴を生かした異分野の学生間の連携による地域連携活動により、学生が悩みに陥ることを未然に防ぐ優れた予防的環境を構築すると共に、生活者の視点に立った本取組を通して、学生が潜在的に抱えている自分の専門に対する漠とした不安・意味づけに明確な解答を与えるものであり、将来学生が直面する困難な課題に適切に対応できる力が養

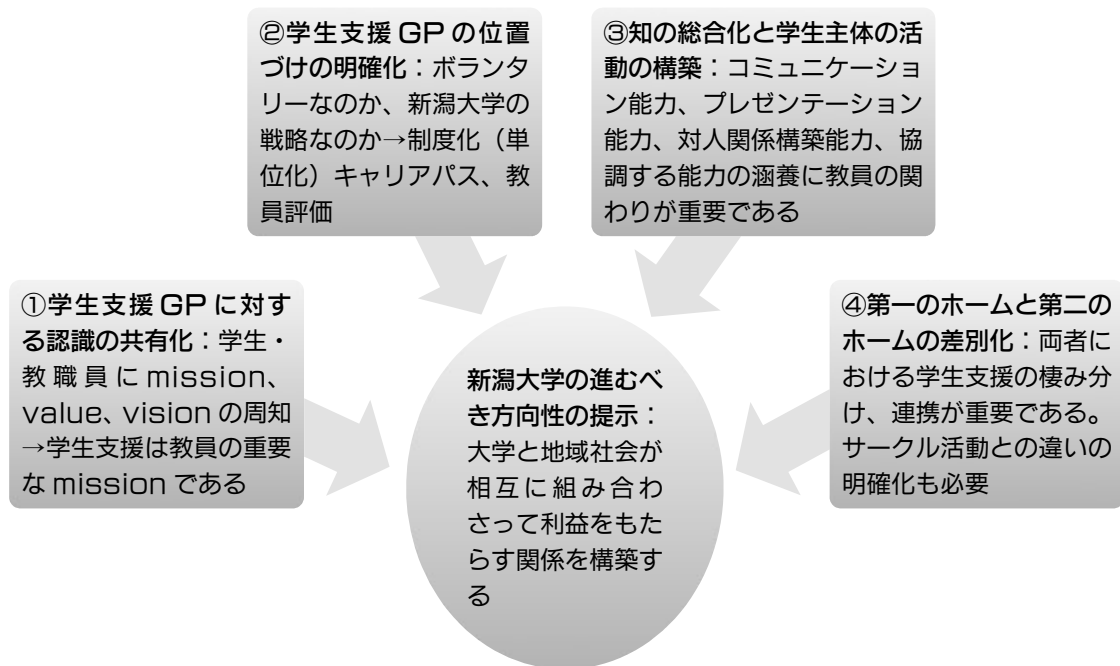


図7 ダブルホームプロジェクトの課題と展望

われることが期待されています。本事業の成功は、大学教育における学生支援の重要性を示すことに繋がり、学生の成長に大学がどのように寄与できるかを示す証左になるでしょう。

以上のように、ダブルホームプロジェクトは学生の成長への寄与に対して大きな期待が寄せられています。今後の課題も明らかになっています（図7）。一番の問題点は、ダブルホームプロジェクトに対する認識の共有化です。教員にとって教育・研究・社会貢献は mission としての位置づけが共有されているのに対し、学生の人間的成長に関わる学生支援については余計な仕事という認識をもつ教職員が未だ多いようです。本学の理事である絹川正吉先生によると、現在、教育を正課と正課外に区別せず、トータルに捉えることの重要性が述べられています。単に専門家を育成するということだけではなく、卒業後に社会で、一市民と

して社会に参加し、社会をより良く豊かにするために活躍出来るような人材を育成するために、何が出来るのかを考え、学生のみならず教職員もこうした価値観を共有し、実践していくことの重要性を痛感しています。そのためには、ダブルホームプロジェクトの位置づけを明確化し、様々な学生の人間的な成長を促すプログラムを用意し、知の総合化と学生主体の活動を構築する必要があるでしょう。また、第二のホームは、第一のホームやクラブ活動とは役割が異なることも明らかになりつつあります。今後はダブルホームプロジェクトの広報活動に重点を置き、構成員の価値観の共有化に努めていきたいと思えます。

尚、本原稿は、紙谷智彦副機構長、浜島幸司准教授を始めとした学生支援部門の全面的なご協力を得ました。この場を借りて感謝の意を表します。



「ダブルホーム制による、いきいき学生支援」に参加して

G ホーム「暖」担当教員 山村 健介
(医歯学系・准教授、口腔生理学分野)

昨年度からはじまった「ダブルホーム制による、いきいき学生支援」で、第二のホームのうち「暖」というグループを担当しています。現在の構成メンバーは教員3名(法、教育、歯、各1名)、事務職員1名、学生8名(人文1名、教育1名、経済1名、歯1名、工3名、農1名)です。

ダブルホームプロジェクトがはじまり、ホーム担当教員になったとき私が思ったのは「こういうプロジェクトに参加を希望するのは、向学心豊かで積極的な学生さんだろうな」ということでした。しかし初めてのミーティングに集まってきた学生の印象は、私の予想とはだいぶ異なるものでした。真面目、には違いないのですが、皆シャイで私が何か話し始めるのを待っている感じでした。あらかじめ作ってきてもらった自己紹介用紙に目を通すと、このプロジェクトに参加した理由が、「他学部の友達が欲しい」、あるいは「大学の先生と話してみたい」というようなものでした。そう言われてみると、人間教育の場(例えばコミュニケーション能力の涵養)としての課外活動の重要性は長い間指摘され続けてはいるものの、運動が得意で体育会系のクラブに入ろうという学生や、楽器の演奏などの特技をもつ学生以外の「普通の学生」に対する受け皿はあまり用意されていないのだな、と思いました。そういう観点からみると、本来の趣旨とは多少異なるものの、ダブルホームは、大学が自ら用意する「クラブ活動に参加しない学生」の受け皿としては非常に面白い試みであると感じています。

初ミーティングから半年あまりが過ぎ、「暖」のメンバーもすっかり打ち解け合い、第二のホームでの活動を楽しんでいるように思います。昨年度、「暖」が参加したプロジェクトは医学部腎研究所

の山本 格先生が担当される「ヒト腎臓・尿プロテオームプロジェクト」でした。文化系の学生が専門的な話に興味をもってくれるか心配しましたが、山本先生がご自身の趣味(なんと「石集め」)や研究者になろうと思った理由などの話もまじえながら非常にわかりやすく話をしてくださったので、学生達も先生の話を楽しみながら聴くことができ、「プロジェクトに参加しなければ知ることができなかった医学研究の世界や研究者の素顔を知ることができて良かった」との感想をくれました。

今年度、「暖」は農学部の紙谷智彦先生が担当される「新潟大学学生・阿賀町合同ミニ学術調査隊」というプロジェクトに参加しています。阿賀町は、2005年に旧津川町・鹿瀬町・三川村・上川村が合併して発足した町で、美しい山や川などの潜在的観光資源に恵まれた地域ではありますが、多くの限界集落(げんかいしゅうらく: 過疎化などで人口の半数以上が65歳以上の高齢者になり社会的共同生活の維持が困難になった集落)をかかえています。この地域が抱える問題の調査や隠れた資源の掘り起こしを通して、阿賀町の人々とのつながりを深めることを目的として企画され、「暖」を含め3つのグループが参加しています。これまでに予備調査、3グループ合同調査として2回阿賀町を訪問し、役場の方、集落の方との交流を行いました。現代はテレビやインターネットを通して映像や音声のついたさまざまな情報が居ながらにして手に入ります。しかし観光客としてではなく、調査隊の一員として実際に阿賀町を訪れ、このプロジェクトに関わる様々な人達と出会い、話してみることで、現場に行くと「五感を使って」感じないとわからないことも多いのだなとあらためて感じました。現在「暖」は合同調査での経験を基

に、「暖」が担当することになった阿賀町平瀬地区における調査計画を練っているところですが、調査の行程についての役場の方とのやりとりの中で、期せずして阿賀町ミニ学術調査隊プロジェクトに対する阿賀町行政の側の熱い思いを知ることとなりました。このような人との出会いやコミュニケーションは、学生に限らず私たち教職員にも学びの場を与えてくれます。一期一会といいますが、歳をとるにつれて、人との出会いのバリエーションが減ってきます。私がこの十年に得た出会いの多くが大学教員として、あるいは研究者としての出会いです。今回私が経験した出会いは、ダ

ブルホームに参加することなしには得ることのできなかったものだと思います。

あと2週間後には、いよいよ阿賀町平瀬地区の第一回調査を行います。調査というと堅いですが、調査対象は自然を含めた平瀬地区の環境とそこに住む方たち、そして平瀬地区を治める阿賀町の行政とそれに携わる方たちです。新しい出会いがそこに待っています。どのような出会いが私たちを待っているのか、「暖」の学生たちとともに新しい出会いを楽しみ、そして学んでこようと思っています。





自分から動く

X ホーム「φ」 清野 雄多
(歯学科2年)

「自分は何をしたいのか、わからない」と、よく聞く。文系・理系関係なく、僕の周りでは、だいたい80%の友達がこう言っている。しかし、よく話を聞くと、その友達はある分野に興味を持っているし、その分野について調べたりもしている。

だから、本当はこういうことなのだと思う。その友達は、「こんなことをやってみたい」と思っても、その先にはものすごい苦労が待っているような気がして、なかなか一步を踏み出せないでいるのだ、と。

その点、僕の一步目の足取りは軽い。そのおかげで、ダブルホームで新しいホーム(班)をつくることができたのだと思う。しかし、気ままに新しいホームをつくったわけではない。慎重に準備をして、その上で、思い切って一步目を踏み切ったのだ。そして、この新しいホームをつくる上で、「ここが一步目だった」と思える出来事がある。

それは、今年の4月23日の活動報告会でのことだ。ここで、19年度の活動報告を全ホームが行う。そして、この会で僕は新しいホームをつくる、と全体に発表した。この発表は、本当に緊張した。会場は大講堂で、ダブルホームに参加している教職員も勢ぞろいだった。そのうえ僕が発表するのは最後で、その頃には皆疲れていたし、発表に飽きている頃合いだった。これは、不利な状況だった。そこで僕は、こう話した。

「いろいろな学部があって、僕たちは将来、様々な職業に就くと思います。でも、働くということに関して、共通して言えることがあります。僕たちは、自分の想いと、自分の知識で社会にエントリーしたい、ということです。知識や技術を磨き、そこに自分の想いをのせて、仕事をする。そしてそれが、相手にも通じる。ここに、人と人が通じ合う悦びがあると思うんです。それはダブルホームの活動も同じではないでしょうか? ダブル

ホームでは、学生たちが一生懸命に考えた上で、地域の人たちと関わるのですから」

このような内容を(もっと拙いが)話した上で、「この活動をもっと多くの人に知ってもらいたい。活動に参加した学生の意見を多くの人に聞いてほしい。だから、僕は新しいホームをつかって、広報専門で活動したい」と発表した。

そして、報告会后、部門長と副学長が僕のところにやってきてこう言った。「良い発表だった。君のしたいことはダブルホーム制の活動として、ふさわしい。君の発表を聞かないで帰った人は、損したね」と。これには驚いた。自分では、言いたいことを言えなかったと感じていたからだ。それでも、僕の言いたいことが伝わっていたのだ。そのとき、唐突に胸に込み上げてきたのは、喜びというよりは、厳かな感動だった。そうか。これが人と人が通じ合う悦びなのか。

そして、現在、僕たちのホームは順調に広報活動を続けている。僕たちの活動の対象は、「80%の一步を踏み出せない人たち」だ。僕らの活動は、つまり、「一步目を怖がらなくて良いよ」とか、「不安なら、ここにいる人たちと進んでみない?」だったりする。なぜなら、僕らの活動は、100%自分たちのアイデアだからだ。活動自体に、色々な「一步」がある。僕たちの活動を見せることで、「自分も出来るかもしれない」と感じてもらえるだろう。思い切って一步を踏み出したら、こういうことがあったんだよ、こういうところに行けたよ、こういう人から話が聞けたよ、と語るのが僕たちの仕事なのだ。

そして、ダブルホームは、一步目を踏み出すには、絶好の場所だ。学びたいように学ぶことができるし、立ち止まりたいなら立ち止まっても良い。体験したこと、実感したことを身につけ、学んでいける場所なのだ。自ら学ぶ、という自然な姿勢がダブルホームにはあると思える。



「ダブルホーム制による、いきいき学生支援」に参加して

E ホーム「アース・アース」 五十嵐 隼 人
(経済学部2年)

僕はこの制度に参加して本当に救われた気がします。僕は一年生の時は部活やサークルにも属さず、話せる友だちも少なく、はたから見ればさびしい大学生活を送っていました。人数が多い学部にはそう珍しくないことだと思います。こういうことが起こると、授業が終わればすぐに家に帰り、そして次の日も次の日もこういうことの繰り返しで、一種のルーティンワークになってしまって、楽しさや面白さがなくなっていました。この繰り返しを改善する意欲も無くなってしまいました。こういう時に、一年生の二学期に、経済学部でスタディ・スキルズという授業がありました。ある日、この授業の先生が「ダブルホーム制というものが文科省から支持されてできあがったそうです。もし参加してみたいという方は私か、もしくは学務係に申し出てください」というような内容のことをおっしゃっていました。その時に僕は、正直「なんだそれ！」という感じでした。先生が「私もよくはわからないので、このようなものがあるとしたら今は言えませんね。」という風に言われたら、誰でもそう思いますよね。でも、そんな未知のものに逆に乗っかってみれば何か変わるかもしれないと思い、申し込みを決意しました。このときの僕は何か変わったことがしてみたいという気持ちだったので、この未だわからないダブルホーム制というものに参加しようと思ったというのが本音だったのかもしれませんが。こうして僕はこの企画に参加しました。

プロジェクトが始まり僕らのホームも活動を始めましたが、いきなり暗礁に乗り上げてしまいました。参加人数が少ないという事態が起きたんです。これは結構堪えました。これにより、昨年度はあまり活動できないままでした。しかし、「ホームの皆さんも何かがやりたいから入ってきたんだから、連絡を送り続ければ来てくれる」という思

いから一生懸命連絡を送り続けていました。すると今まで連絡が途絶えていた人からも連絡が返ってきました。皆さんはそれぞれの用事で参加できなかったということを知り、決してやる気がなくなっただけではないと気付いた時はとてもうれしかったです。このことから、あきらめずに何かをしていけば、いつかはいい方向に転じてくれるのかなという風に思いました。これに気づくことができたのはとてもいいことだったと思います。

そして何より僕にとって大きかったことは、友だちができたということでした。先ほども言ったように、大きな学部では、話し相手を見つけにくいというデメリットがありました。こういう悩みが解決されたということで精神的にも楽になったような気がしました。昼休みは以前なら一人で昼食を講義室で食べていたりしましたが、今では仲間と一緒に食べるということが多くなりました。放課後もまた然りです。以前は本当に授業が終わったらすぐに帰るということを繰り返していましたが、今では仲間と馬鹿話などをして楽しく過ごしています。このように、以前は何も楽しさなどがなかった大学生活が、このように居場所ができたことによって、楽しくて充実感あふれる大学生活に変わりました。これからもこの活動を一生懸命やっていきたいと思っています。第一のホームがおろそかにならない程度にですが。

この「ダブルホーム制による、いきいき学生支援」に参加してみて、これら二つのことを学ぶことができました。この制度は僕を少しかもしれませんが成長させてくれたと思います。学生にとってこの制度はとても有益なものになってくれると思います。まあ、こんな風な学生は少ないかもしれませんが、学部を越えた人との交流は面白いと思います。この新潟大学にこういう画期的な制度があるということはすばらしいなと思いました。